

クリスマス物語

ルカによる福音 21:25-28、34-36

(そのとき、イエスは弟子たちに言われた。)

「太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。

放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に罨のようにあなたがたを襲うことになる。その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

説教

クリスマスはキリストの誕生を祝うことにくわえて、救い主キリストの再臨を待ち望む日であることをおもいなさい。ただクリスマスに浮かれているだけではクリスチャンとしてはちょっと恥ずかしいですよ、というのがキリスト教会のちょっと堅苦しいクリスマス物語です。

これは地上のイエスの誕生祝いにかさねて、天のイエスさまの降臨日を祝う気持ちを持ちましょうというクリスマス解釈です。もちろんほかの解釈もありますし、キリスト誕生の物語はよろこばしい出来事なので、人それぞれ自由に解釈していいのでしよう。

ユヴァル・ノア・ハラリは「サピエンス全史」の中でホモサピエンスが人類としていきのびた理由として認知革命をあげています。それはホモサピエン

スだけが信仰をもつことができたから、おなじ神を信じその物語を語る
ことができた、それが認知革命だといっています。もちろんキリスト信仰の
ずーっと前の信仰ですからその信仰は原始的なものです。おなじ物語を信じ
ることで互いに協力することができた。だから、ほかの人類は滅びたのにホ
モサピエンスだけは生き延びることができたと論じています。

はじまりとおわりを同時に想像するというのはキリスト教の考え方の特徴の
ひとつです。キリストの誕生ではじまり、世界の終わりにキリストが再臨す
るというかたちでキリスト教は完結します。ほじまりがあり、おしまいがあ
るといのはスッキリしていて気持ちがいいものです。そして終わりの日、
終末はおそろしい日ではありますが解放の日なのだときょうの福音は教えて
います。

そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。

**このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解
放の 때가近いからだ。ルカ 21:27-28**

コロナの第六波の足音が聞こえ、核戦争の可能性をまだ解決できずにいるこ
の世の中は終末を予感させます。それだからこそ、お互いの違いをこえて協
力できる道が試されているとも考えられます。

キリストの誕生を祝うわたしたちに豊かな想像力があたえられ困難の克服へ
の道が見いだされますように。
